今週の為替相場見通し（2023年2月6日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		128.08 ～ 131.20	131.20	129.00 ～ 134.00
ユーロ	（ドル）		1.0793 ～ 1.1034	1.0795	1.0650 ～ 1.1000
（1ユーロ=）	（円）		139.98 ～ 142.32	141.65	141.00 ～ 145.00
英ポンド	（ドル）		1.2047 ～ 1.2415	1.2049	1.1900 ～ 1.2300
（1英ポンド=）	（円）	*	156.74 ～ 161.42	158.16	156.00 ～ 162.00
豪ドル	（ドル）		0.6919 ～ 0.7158	0.6924	0.6700 ～ 0.7100
（1豪ドル=）	（円）	*	90.45 ～ 92.66	90.83	88.00 ～ 93.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　小野崎　順基

（1）今週の予想レンジ：　129.00 ～ 134.00 円

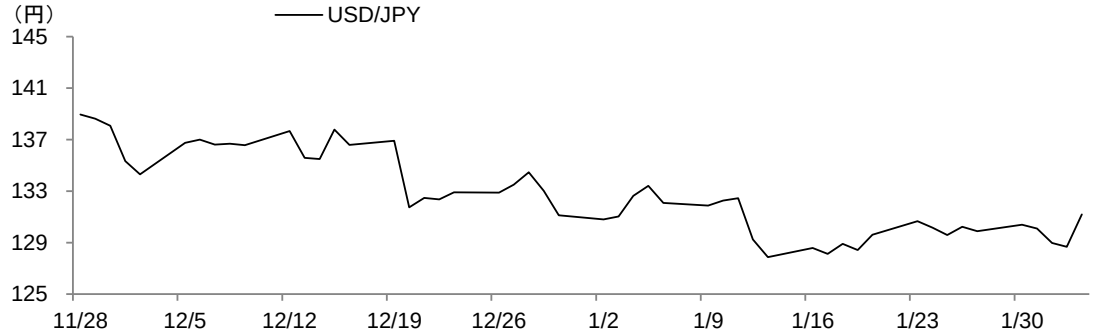
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、週央にはFOMCにおけるパウエルFRB議長会見を受け下落も、米1月雇用統計の堅調な結果を背景に週を通すと上昇した。週初1月30日、129.88円でオープンしたドル/円は仲値にかけて130円台に上昇も、令和臨調による政府・日銀に向けた提言が公表となると、日銀による金融政策修正への警戒感から円買い相場となり129円台前半に反落。海外時間は米金利上昇を受け一時130.56円をつけた。31日はドル売り相場の中、130円台前半でじり安の展開。海外時間は、米10～12月期雇用コスト指数が市場予想を下回ると、米金利低下とともに129円台後半に下落。引けにかけては米金利反転を受け130円台を回復した。2月1日はFOMCへの警戒感から130円台前半でじり高推移。海外時間は、米金利低下を受け129円台前半へ下落。FOMCの+25bp利上げ公表直後には一時的に上昇も、議長会見における「ディスインフレのプロセスが始まった」等の発言が材料視され、米金利低下とともに128円台に反落した。2日は前日の流れを続け、128円台半ばまでじり安。海外時間は、欧米金利の低下を背景に一時週安値となる128.08円まで下押した。3日には米1月雇用統計にて非農業部門雇用者数が前月比+51.7万人と予想を大きく上回り、失業率も予想比強めの結果であったことから米長期金利の上昇とともにドル買いが優勢となった。また、米1月ISM非製造業景気指数が予想を上回ったことも材料視され一時週高値の131.20円をつけた。週明け本日は、黒田日銀総裁の後任人事について雨宮副総裁に就任を打診したと伝わるとドル/円は上昇してオープンしている。

今週のドル/円相場は米経済指標と日銀人事に関するヘッドラインに注目したい。先週にFOMCを終えたがパウエル議長は今後2回の利上げ見通しが示唆され、また、年内利上げを否定するなどややタカ派な姿勢となった。ただし、今後についてはデータ次第とされているように現段階で姿勢を探るには不確実性が多い。そのため、改めてインフレ指標に注目を集めることになろう中で、10 日（金）に米2月ミシガン大学消費者マインド（速報）が公表される。1月の結果（確報）は64.9と速報値から小幅に上方修正され、3か月連続で上昇し2022年4月以来の高水準となった。また、1年先のインフレ期待は+3.9%と、3か月連続で低下し、2021年4月以来の低水準となった。ブルームバーグの事前予想では、2月ミシガン大学消費者マインドを65.0と見込んでいる。また、一部報道では10日（金）を軸に日銀正副総裁人事案を国会に提出する方針とされているように、日銀の金融政策を巡る見通しに注目されやすい。

（3）先週までの相場の推移

先週（1/30～2/3）の値動き：　安値 128.08 円　高値 131.20 円　終値 131.20 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部　為替営業第一チーム　松木　悠馬

(1)今週の予想レンジ:　1.0650　～　1.1000　　141.00　～　145.00　円

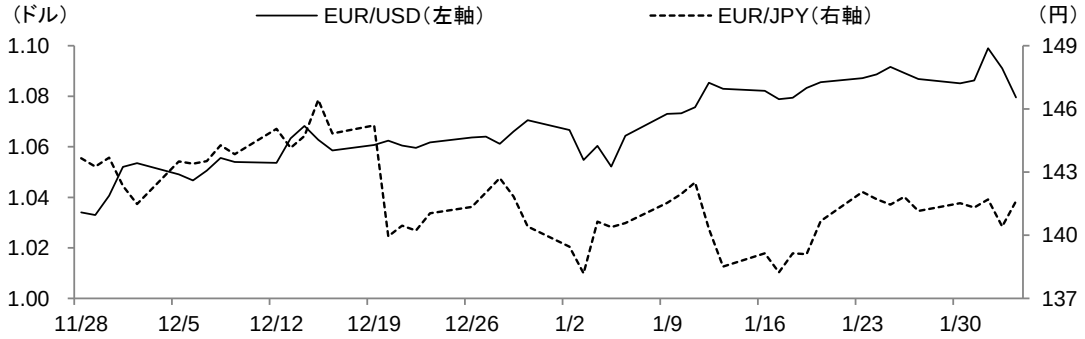
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、米欧中銀会合の結果に荒い値動きとなって一時1.10台を記録した。週初30日、1.0871でオープンしたユーロ/ドルは、西1月消費者物価指数の強い結果を受け1.09台に上昇も、NY時間には米金利上昇を背景に1.08台半ばに反落。31日、ユーロ/ドルは独金利低下を受け、1.0802まで下押すも、ユーロ圏10～12月期GDP(速報)の堅調な結果や米金利低下を背景に1.08台後半に上昇した。1日、ユーロ/ドルは米1月ISM製造業景気指数が軟調に終わったほか、パウエルFRB議長会見を受けた米金利低下を背景に、昨年4月以来となる1.10台に急伸。2日、ユーロ/ドルはドル売り相場の中、一時週高値となる1.1034に続伸。ECB政策理事会は+50bpの利上げを決定も、ラガルドECB総裁による足許のインフレ鈍化への言及が材料視され、独金利低下すると一時1.09を割り込んだ。3日、ユーロ/ドルは、発表された米1月雇用統計や米1月ISM非製造業景気指数の強い結果にドル買いが強まると1.08を割り込み週安値となる1.0793をつけ、結局1.0795で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は底堅く推移すると予想する。先のFOMCとECB政策理事会を比較すると、FRBは+25bp/ECBは+50bpとどちらも市場予想通りの利上げを実施。会合後の総裁会見時にはどちらもややハト派な内容と解釈され通貨売りの様相となったが、各中銀のスタンスは異なる。パウエルFRB議長はインフレの鈍化に言及し、今後も複数回利上げはするものの、利上げの停止時期についてはデータ次第と述べたのに対し、ラガルドECB総裁はインフレは強固で3月+50bp利上げは整合的、3月以降については次回会合で決定すると述べている。上記のように、インフレの鎮静化が改めて意識され、次回も+25bpの利上げが大宗なFRBに対して、インフレ圧力が強く、次回会合での利上げ幅が+50bpとなる可能性の高いECB間の政策差が意識され欧米間の金利差縮小を背景にユーロ/ドルは底堅く推移すると予想する。対円でのユーロ相場についても同様の展開となろう。FRBの利上げプロセス終了も意識されてか米国株式を中心にリスク資産が上昇しており、リスクオンの相場となればユーロ/円相場には追い風となろう。ただ、次期日銀正副総裁の人事に関するヘッドラインには留意したい。今週は6日(月)にユーロ圏12月小売売上高、10日(金)に独12月経常収支等の指標の発表を控える。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/30～2/3)の値動き:　(対ドル)　安値　1.0793　　高値　1.1034　　終値　1.0795
(対円)　安値　139.98　　高値　142.32　　終値　141.65



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　神田　史彦

(1)今週の予想レンジ:　1.1900　～　1.2300　　156.00　～　162.00　円

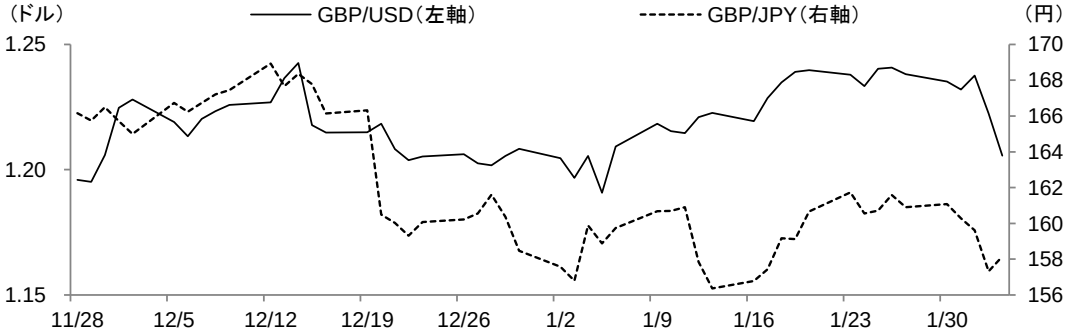
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は下落。週初30日は、対ドルで1.24台近辺で始まる。朝方こそ堅調だったが、米金利上昇/米株下落の中1.23台前半へ値を消す。翌31日は月末フローもあってかポンドは対ドルで弱含む場面が多かった。ユーロ圏10～12月期GDP(速報)が予想に反してマイナス成長を回避し、テクニカルな不況入りをひとまず避けたことでユーロが買い戻されたことが目立ったがポンドは続けなかった。1日はFOMCを待つ中で欧州時間は小動き。FOMCではややハト派的に捉えられ米金利が低下しドルも下落。ポンドは1.24レベルまで買い戻された。2日には英中銀が予想通り+50bp利上げし政策金利を4.00%とすると一瞬上振れするも1.24には届かず、英金利も下落に転ずる。声明文やベイリー英中銀総裁の記者会見がハト派的と解釈される中でポンドは結局1.22台前半まで下落。週末3日は1.22半ばまで若干の買い戻しで始まるも、堅調な米1月雇用統計を受けたドル買いでポンドは1.21レベルまで下落した。続いて米1月ISM非製造業景気指数がこれまた予想を大きく上回ると、さらなるドル買いに1.20台へ下落した。また対円でもポンドは弱含み。週初161円台で始まったが日々値を切り下げる展開。3日には156円台まで下落した後、米経済指標後のドル円の上昇で158円台まで買い戻された。

今週の英ポンド相場は、上値重い推移継続を見込む。既に2四半期連続で前期比マイナス成長となったことで不況入りとなっている英経済が、お隣ユーロ圏が不況入りをひとまず回避したことからも劣勢が際立っており、殊にリスクセンチメントに敏感なポンドの弱含みを見通すのが自然。一方で、各国中銀の今後の利下げに向けての思惑も盛り上がる中で、先週の米経済指標に見られたように予想を上回る結果を素直に好感する地合いとなっていることから、英経済指標の上振れでの上方リスクもあり得る。10日(金)には英10～12月期GDP(速報)が予定されており、英経済の不況脱出に少し期待して待ちたいところ。なお、通貨オプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティは、ポンドの今週の対ドル変動をおよそ上下1%程度、対円で上下2%程度見込んでいる模様だ。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/30～2/3)の値動き:　(対ドル)　安値　1.2047　高値　1.2415　終値　1.2049
(対円)　安値　156.74　高値　161.42　終値　158.16



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　尾身　友花

(1)今週の予想レンジ:　0.6700　～ 0.7100　　88.00　～　93.00　円

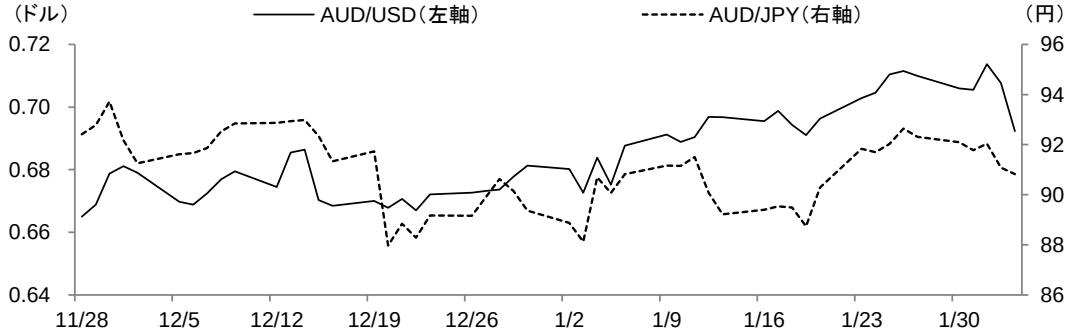
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、もみ合いの後、下落した。週明け30日の豪ドルは0.71近辺でスタート後、0.7120まで上昇するもNY時間にかけては各主要中銀の金融政策発表を週後半に控え、米長期金利が上昇する動きにドル買いが強まり、米株も軟調推移をみせると豪ドルは一時0.70台半ばまで下落した。31日の豪ドルは0.7060でスタート後、豪12月小売売上高が予想以上に減少したことで軟調に推移し始め、テクニカルな短期筋からの下向きのフローも手伝い、ロンドン時間では一時0.6984まで下落した。但し0.69台では旺盛な実需や短期筋の買いに支えられ、その後米10～12月期雇用コストが予想を下回り、インフレ鈍化の兆候が新たに示され、今週のFOMCで利上げ幅を減少させる理由が追加された事で米ドル売りとなり、米株は反発。この流れから豪ドルは0.70台を回復した。1日の豪ドルは0.7055付近から取引開始後、FOMCを控える中で底堅い値動きが継続。FOMCでは全会一致で+25bp利上げを決定し、声明文では「継続的な利上げが適切」との文言を維持した。その後のパウエルFRB議長による記者会見では、3月のFOMCで利上げ経路を評価し直すとし、(利上げ停止まで)「あと数回」のところまで来ている可能性があると述べた。パウエル議長による発言がハト派的ととらえられ米国債利回りは大きく低下、株高・米ドル安の反応となり、豪ドルは一時昨年6月来高値0.7145まで上昇した。2日の豪ドルは0.7136でスタート後、約7か月ぶりの0.71台半ばを記録。その後米国時間で、直近の複数企業の大規模レイオフで米1月チャレンジャー人員削減数が10万2千人を越えの2020年以来の多数となったが、その後発表された米新規失業保険申請件数と失業保険継続受給者数が減少しており、米国労働市場の底堅さを見せた事で米ドル買いの流れとなり、豪ドルは0.7069まで下落。NY引けは0.7080下となった。週末3日の豪ドルは、米1月雇用統計が市場予想を上回る強い結果となったことを受けて米ドル買いが優勢となり、豪ドルも0.69台前半まで下値を拡大してクローズした。

今週の豪ドル相場は上値重い推移を予想している。背景は、先週末に発表された米1月雇用統計の強い結果による米ドル買いが豪ドルの上値を重くすると考えている。但し、今週は7日(火)にRBAが予定されており、+25bpの利上げが予想されているが、前回会合の議事要旨では+50bpの利上げや、利上げの停止なども検討されていたことがわかり、波乱の可能性がある。豪10～12月期消費者物価指数は大幅上昇していることもある一方で、豪12月小売売上高は前月比減少しており、インフレの拡大と景気の低迷の狭間でどのような決定がなされるのかやや予想が難しい。一方向に豪ドルが弱含むかはRBAの結果次第と考えており、内容次第によっては相場が豪ドル高に振れる可能性もあると考えている。

(3)先週までの相場の推移

先週(1/30～2/3)の値動き:　(対ドル) 安値 0.6919　高値 0.7158　終値 0.6924
(対円) 安値 90.45　高値 92.66　終値 90.83



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。